

追手門学院大学 2024 年度

「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」

リテラシーレベル 自己点検・評価報告書

令和 7 年 4 月 10 日

追手門学院大学

内部質保証推進委員会

1. 自己点検・評価の実施

本学の数理・データサイエンス・AI教育プログラムにおいて、内部質保証推進委員会（以下、「推進委員会」という。）は、令和6年度実施のプログラム実施状況について自己点検評価を実施した。併せて本プログラムの達成・進捗状況の自己点検評価を実施した。

2. 自己点検・評価の項目

本プログラム全体の点検・評価においては、文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）」の審査項目を基準に評価を行った。プログラムを構成する個々の授業科目の評価については、シラバスや成績評価の妥当性、全学授業アンケートの結果を参考に評価を実施した。

3. 評価結果の判定

評価結果に基づき、以下三段階の評価レベルで判定を行った。

3：優れたレベルの取組みである。

2：標準的なレベルの取組みである。

1：改善の必要がある。

4. 自己点検・評価結果

自己点検・評価の観点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等	評価
学内からの視点		
（観点1）プログラムの履修・修得状況	本プログラムの令和6年度履修者数実績は461名（履修率5.46%）であり、そのうち修了者数323名（修了率70.07%）を輩出した。昨年度と比べて約2.5倍の履修率に向上し、履修促進の成果と考える。一方、履修者の所属学部を分析した結果、昨年度以前と同様に学部間による乖離が大きく、カリキュラム上、データを扱う科目のある学部は一定の履修者がいるが、学科科目に数理・データサイエンス・AI関連科目を有する学部の履修者は低い結果となった。引き続き、履修率の高い「数的処理入門」にて当該プログラムに関する紹介・PRを実施し、各年度の目標とする履修者数の確保に繋げていく。	2
（観点2）学修成果	「全学授業アンケート」の結果を基に、本プログラムのシラバスに記載の到達目標に対する達成度について確認を行った結果、総じて84.56%の学生が到達目標に達したと回答し、昨年度から7.56ポイントのプラスとなった。対策として、以前より本学の学習支援センターが提供しているリメディアル教育の場を有効活用してもらえるよう、更に学生に幅広く周知・PRし、授業後に理解が難しかった内容を気軽に質問できるサービスとして普及させる。とくに本プログラムを構成する各授業の担当教員と連携し、当該サービスの利用促進に繋げていく。	3
（観点3）学生アンケート等を通じた学生の理解度	学生の授業内容に対する理解度に影響を与えられと考えられる使用教材や資料構成、ならびにICTを活用した授業の工夫等について「全学授業アンケート」の結果をもとに確認を行った。結果として、使用教材や提示資料の分かり易さにおける学生評価においては、84.47%の学生が分かり易いと回答し、昨年度より11.07ポイント向上した。さらに授業内の説明や課題、予習・復習に至る進め方において、LMSやPCなど、ICTを活用することで理解し易い授業構成の工夫に関するアンケートに対して、昨年度から4.89ポイント高い89.79%の学生から、引き続き満足度の高い評価を得ることができた。	3
（観点4）学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	後輩等他の学生への推奨度を測る指標として、該当科目の授業計画や課題提出のスケジュール、理解度に繋がる予習・復習の具体的な指示など、分かり易い授業の進め方に関する「全学授業アンケート」の結果をもとに確認を行った。結果として、85.48%の学生から総じて満足度が高いとの評価を得ることができた。科目ごとの評価においても、ほとんどの科目で満足度が80%以上を達成しており、授業の進め方において後輩等他の学生への推奨度は高いと言える。	3
（観点5）全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	該当科目の分かり易い授業の進め方に関する「全学授業アンケート」の結果をもとに確認を行った。結果として、89.45%の学生から総じて満足度が高いとの評価を得ることができた。また、授業内でチャットやメッセージ等の機能を利用し気軽に教員へ質問できる授業環境の整備有無においては74.26%の満足度となっているため、授業内においても理解度を高める教育環境の工夫が成されていると評価できる。また、開講クラス数の拡大が難しかった「情報の科学」において、全1年生が履修できる位のクラス数を開講できたことが、プログラム履修者数の底上げにつながった。次年度は、同じく開講クラス数拡大が難しい「コンピュータ入門1・2」においても、1.3倍のクラス数開講予定なので、更なる履修者拡大を期待できる。	3

学外からの視点		
（観点6）教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	本プログラムは令和4年度からの開講となるため、プログラム修了者のなかで現時点卒業生を輩出していない。よって、進路状況及び企業等の評価は確認できない状況にある。一方で、本学の就職キャリア支援課による進路状況調査や就職先企業へのヒアリング調査、ならびに大学政策課が実施する卒業生アンケートにより、将来的に本プログラムを修了した学生の動向について調査・分析することが可能となる。これら調査データをもとに、本学IR推進オフィスと連携して多角的に本プログラムの有効性について検証することを予定している。	1
（観点7）産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	本プログラムは令和4年度からの開講であるが、令和6年度までの実績でようやく、一定のプログラム履修者数に達した。よって、産業界からの視点を含めた教育プログラムの内容・手法への意見の調査については令和7年度から検討を開始する。具体的には、本学WIL推進センターが主催する実習プログラム先の企業、及び就職・キャリア支援課主催の就職活動イベントに参加する企業等に対してアンケート調査を実施し、企業側の課題・ニーズを収集する。これら意見を推進部局である「共通教育機構連絡会」及び「教務連絡委員会」を中心に本プログラムへの反映を行い、企業側が求める能力を修得可能な教育内容に改善していく。	1
（観点8）数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	全学授業アンケートの「授業の進め方・運営手法」及び「修得した知識・スキルの将来的な必要性」の結果から確認を実施した。いずれの結果においても総じて91.42%の満足度を得る一方で、「授業の進め方・運営手法」については、ディベートやディスカッション等の手法に対して、学生の満足度が、昨年度から6.19ポイント上昇の64.29%にとどまり、改善がみられたものの、主体的な関わりに影響を与えている可能性が懸念された。引き続き、これらアンケート結果をもとにFDを通して授業運営・手法を改善していく。	3
（観点9）内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	全学授業アンケートの「予習・復習に関する適切な指示」「ICTの活用有無」「資料構成・提示資料の分かり易さ」「授業計画や課題提出のスケジュールの適正」など、学生の理解度に関するアンケート結果から確認を実施した。いずれの結果においても総合評価では89.79%の満足度を得る一方で、「板書や資料提示（パワーポイント）等の文字・図表の読み取りやすさ」に関して、昨年度から11.17ポイント向上の満足度84.47%となる結果となった。フルオンライン（オンデマンド）授業のため、引き続きオンライン形式でも分かり易い資料構成と提示方法について更なる満足度の向上を目指したい。	3

以上

追手門学院大学 2024 年度

「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」

応用基礎レベル 自己点検・評価報告書

令和 7 年 4 月 10 日

追手門学院大学

内部質保証推進委員会

1. 自己点検・評価の実施

本学の数理・データサイエンス・AI教育プログラムにおいて、内部質保証推進委員会（以下、「推進委員会」という。）は、令和6年度実施のプログラム実施状況について自己点検評価を実施した。併せて本プログラムの達成・進捗状況の自己点検評価を実施した。

2. 自己点検・評価の項目

本プログラム全体の点検・評価においては、文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（応用基礎レベル）」の審査項目を基準に評価を行った。プログラムを構成する個々の授業科目の評価については、シラバスや成績評価の妥当性、全学授業アンケートの結果を参考に評価を実施した。

3. 評価結果の判定

評価結果に基づき、以下三段階の評価レベルで判定を行った。

3：優れたレベルの取組みである。

2：標準的なレベルの取組みである。

1：改善の必要がある。

4. 自己点検・評価結果

自己点検・評価の観点		自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等	評価
学内からの視点			
（観点1）プログラムの履修・修得状況	本プログラムを構成する科目ごとの令和6年度履修者実績数は、「L&Sゼミ」98名、「未来課題」68名あり、当該2科目を共に履修した実績数は15名、そのうち修得者数は11名（修得率73.33%）であった。昨年度と比べて倍の履修率に向上したことから、履修促進の成果と考える。次年度は履修者規模を増大するとともに、今年度と同様の質保証を実現できる授業展開を図っていく。		1
（観点2）学修成果	対象となる科目の「全学授業アンケート」において、本プログラムのシラバスに記載の到達目標に対する理解度について調査した結果、「理解している」との回答は、95%となった。また73.33%の学生が単位を修得していることから、多くの学生が学修成果を得られたものとする。授業においては、授業回ごとに学修成果を確認しながら、少人数のゼミ形式できめ細やかな対応を実施することができたため、結果として73.33%の修得者を輩出することに繋がったと考える。		3
（観点3）学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	学生の授業内容に対する理解度に影響を与えられとされる使用教材や資料構成等について「全学授業アンケート」の結果をもとに確認を行った。結果として、板書や資料提示（パワーポイント）等の文字や図表の見易さについては、100%が理解し易いと回答した。		3
（観点4）学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	後輩等他の学生への推奨度を測る指標として、目標の達成度と授業満足度について、「全学授業アンケート」の結果をもとに確認を行った。結果として、回答者の目標達成は100%に達した。また、同様に全体的な授業に関する満足度においても授業全体を通して満足したという回答が100%に達した。		3
（観点5）全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	今年度は、昨年度比3倍のクラス数を両キャンパスで開講し、履修率向上に努めた。各科目の履修者数は飛躍的に向上したが、プログラム履修者の向上には、改善の余地があるため、引き続き、リテラシープログラムの科目内、全1年生が履修する科目にて周知を行っていく。加えて、両方のプログラム要件科目の履修を促す施策として、令和7年度より、数理・データサイエンス・AI教育プログラム応用基礎レベルをマイクロクレデンシャルとして認定し、オープンバッジの取得を推奨することとしている。また、「全学授業アンケート」において、少人数のゼミ形式のため手厚い指導に加え、授業内でチャットやメッセージ等の機能を利用し気軽に教員へ質問できるとの回答が、今年度は95%となっているため、授業内においても理解度を高める教育環境の工夫が成されていると評価できることから、来年度も同じ質の教育を展開し、プログラム修得率の向上に努めていく。		2

学外からの視点		
(観点6) 教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	本プログラムは令和5年度開講となるため、修得者のなかで現時点卒業生を輩出していない。よって、進路状況及び企業等の評価は確認できない状況にある。一方で、本学の就職・キャリア支援課による進路状況調査や就職先企業へのヒアリング調査、ならびに大学政策課が実施する卒業生アンケートにより、将来的に本プログラムを修了した学生の動向について調査・分析することが可能となる。これら調査データをもとに、本学IR推進オフィスと連携して多角的に本プログラムの有効性について検証することを予定している。	1
(観点7) 産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	本プログラムは令和5年度開講となるため、十分な評価を得るための修得者数に至っていない。よって、産業界からの視点を含めた教育プログラムの内容・手法への意見の調査については令和7年度実施に変更する。具体的には、本学WIL推進センターが主催する実習プログラム先の企業、及び就職・キャリア支援課主催の就職活動イベントに参加する企業等に対してアンケート調査を実施し、企業側の課題・ニーズを収集する。これら意見を推進部局である「共通教育機構連絡会」及び「教務連絡委員会」を中心に本プログラムへの反映を行い、企業側が求める能力を修得可能な教育内容に改善していく。	1
(観点8) 数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	「全学授業アンケート」で85%の学生が「個人ワーク、グループワーク、ディベート、ディスカッション、ワークショップなどの手法を活用していた」と回答していることから、「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させる機会を十分に提供できていたといえる。	3
(観点9) 内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	「全学授業アンケート」の板書・資料提示（パワーポイント）等の文字や図表の見易の分かり易さ、目標の達成度と授業満足度に関するアンケート結果から確認を実施した。いずれの結果においても総合評価では100%の満足度を得ているので、「分かりやすい」授業を実施できていたと考える。 また、令和5年9月26日発表の「学習における生成AI（ChatGPT等）の使用について」において本学は、「今後、生成AIの精度は更に向上し、社会の様々な場面で利用されることが予測され」ることを前提に、「これら生成AIは大学での学びを効果的に進める手助けとなる可能性」があることを指摘しつつメリットや留意点を引き続き周知している。今後、社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえた、教育内容の継続的な見直しは自明であり、また、学生生活に欠かせないツールとして本学専用アプリに実装予定のAIアシスタントの使用を通じて、AIを使い、慣れ親しむ環境を整える予定をしている。	3

以上